
創造部

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造部

【Nコード】

N7234V

【作者名】

朱鷺

【あらすじ】

創造部。

活動内容は『多彩な物を創造し、理解を深める』という、一般的な物。

しかし、創るものが異常で……？

……どうなっていやがる！この部活！！

他の所でも書いていました。

一回書いたのですが、何か設定がグダグダなのでやり直します。ご迷惑おかけして御免なさい。

プロローグ

「ねえ。貴方の高校生の頃の話を知りたい。」

そう、妻がねだって来たのは突然だった。あまりに突然で驚いた程だ。何故か、聞き返すと、

「ほら、結婚式に久龍さんって人来ていたでしょう？栗色の髪の毛の。結婚式でスピーチやってくれたじゃない。途中で、『こんな漢字読める訳ねえだろ！！もつと簡潔に書けや！！大神！！』って怒って女の人に吹っ飛ばされた人。その人、確か、高校の時の先輩・・・だったよね。大学も別々で、家も近い訳じゃないのに、スピーチしてくれたあの人が興味があったの。」

そう言って、ニコリと妻が笑った。高校の時の話、か・・・。創部での出来事はちょっと恥ずかしい、かな・・・。色々、問題を起こしていたからね・・・。

「え？何？貴方、問題児だったの？」

目をまんまるにして妻が聞いた。そんな顔に思わず笑ってしまう。

「何笑ってんの？」と突く妻。そしてこの人になら話してもいいと思えた。「長くなるよ。」そう前置きして、話し始めた。

嵐の前兆

放課後、俺と富山帰り学活の時に渡された『部活説明冊子』という名前の通りの事しか書いていない冊子を、パラパラ漫画と同じくらしいスピードで見ながら校舎を歩いていた。

「ナツ。なんか面白い部活、あつか？」

と富山が答えの分かっている問いをする。

「ねえよ。」

・・・この会話、何回目だ？数えておけばよかつたな・・・。思い出して見るか？そう思ったがやめた。自分自身の記憶能力は自分が一番よく分かっている筈だ。もし、俺が記憶力に長けていたら、中学の時にやった期末テストでの社会と理科の点数は上がっている筈だ。年トカ、覚えてないつつの。徳川家って、名前の最初に『家』がつく奴が多すぎるんだつつの。

「ナツ、バスケ部なんてどうだ？」

・・・以外だな、富山。お前が体育会系だったとは。まあ、今日の体育でお前の運動神経は良いというのは知ったが。

「違えよ。ナツ、お前、俺との付き合い何年だと思っている？」

・・・お前と知り合ったのは高校入ってからだよな。つまり一週間か。いやあ、一週間でこんなに仲良くなるとは思いもよらなかつたな。年を聞いているのか？なら、360日分の7年だよな。

「間近で女子の体育着が見れるんだぞっ!!間近でっ!!しかも、男子バスケのマネージャーの女の子、メツチャ可愛いんだぜ?入る価値、あるだろっ!!!!」

・・・脱力すると同時に納得した。これでこそ、俺の知っている富山だ。

・・・まあ、俺は遠慮しとくぜ?体育の時間で女子を舐める様に見て、氷河期並みの冷たい視線を浴び、女子学級委員長の中川に放課後30分位怒られ、クラスの全員の女子から避けられる。ちう悲しいスクールライフは送りたくないからな。俺はお前みたいに変態ではないが、声を掛けると逃げられると言うのは良い気分じゃねえからな。

富山は触れたくない話題だったらしくがっくりと肩を落とす。まあ、気にすんな。出会いは外にもあるぞ。

「・・・いいよなあ、お前には可愛い妹が居てヨオ」

・・・何故その話題に飛ぶのが疑問だ。一回、お前の思考回路を見てみたいものだ。

「中一だよな。中学生なのに背が小さくて、童顔で、ラブリーオーラ全開で、礼儀正しいし、学級委員長を務めるつつ偉い一面もあるし・・・。」

・・・待て。何で人の妹についてそんなに知っている?しかも、俺の妹は可愛くないし、ラブリーオーラ全開でもない。家に帰ると俺の部屋を猫の餌場化させ、俺の部屋の床に小便をしているのを見て馬鹿笑している妹だぞ?実際やられてみる。どれだけテンションが下がるか・・・。それを、猫と妹にデコピンを一発と一階から雑巾と

フアブリーズを持って来させる刑で許してやった上、親にも言わなかった、俺の方がよっぽど偉いと思うがな。・・・まあ、幸いにもベットにも絨毯にもついて居なかったから良かったが。

「おまえの許可さえ下りれば俺の事、紹介してくれねエか？」

・・・俺の妹に彼氏が出来るのは一向に構わん。だが、お前と妹が仲良く手を繋ぎながら『ご挨拶死に來ました』なんて言ったら、俺の親は猛反対するぞ？過保護だし。ついでに、紹介するのは断らせてもらおう。妹が俺の友達に変態が居ると知ったら、きつと朝に起こしてくれるという超特別権を剥奪される事になるからな。そうすると、俺は自力で起きなければならぬ。毎朝、俺の家で止めた覚えは無いのに何故か止まっている目覚まし時計を怨みながら、グーグー鳴る腹の虫を押さえこみ、登校路の殺意の籠った坂を息を切らしながら登るのは、良いダイエットにはなるだろうが、御免蒙る。

「・・・ケチだな。全く・・・。お前の家に不法侵入するしかねえじゃねエか。」

・・・そう言う発想に至るんだな。お前は。・・・まあ、来る分には構わん。お前の変態を發揮しないと云う条件付きなら妹位は紹介する。オプションセットで猫はどうだ？無料だぞ？

「んにしても、面白そうな部活ねエか？」

「ねえよ。」

・・・この会話、何回目だ？

ナンパという名の勧誘が運んできた不幸の始まり

そんな会話をしていると、

「どうしたのかい、一年生諸君。」

声がして振り返った。

腰まである長い髪を垂らし、もう眩しい位に笑顔を見せている女の先輩が居た。・・・先輩だろう。俺の予想では。

「仮入部一日目から悩んでいるんじゃないやあ、ダメなんだよ。こういう時は、パパッと決めて、グイグイって参加して、ババーンと入らなきゃ、部活という物には入れないのさ。」

・・・男言葉なのは気のせいではない筈だ。・・・というか、誰だ？と思っていると富山が

「どうもっ！！一年C組の富山とみやま 一樹かずきです！！お会いできて光栄です！！先輩は何の部活に入っているんですかっ！！俺、先輩の居る部活に入りたいです！！」

俺は富山が高校生になって初めてこんなに積極的な姿を見た。この積極性を授業でやってみたらどうだ。きっと『関心・意欲・態度』の欄ではAがつくぞ。

先輩はあはははと明るい声を発して

「僕は、鶴羽つるは 翠みどりさ。どうもよろしく、トミちゃん。」

「はいつ！！宜しく願います！翠先輩！！」

いきなり名前呼びかよ。

「で、君の名前はなんだい？」

俺・・・ですか？

俺は名前とクラスを自己紹介した。富山は「もつとテンション上げようぜ？逆ナンだけ？しかも美人先輩から」とか耳元で呟いたが全部右耳から聞いて左耳から流した。俺のユウいつの特技だな、これは。

「そうかい、じゃあ、トミちゃんとキヨン君だねっ！！」

「キヨン？」

富山が俺の事を見る。又か・・・。中学で一人の女子からそう呼ばれていた。別に、彼女ト力言う感じではない。たまたま、勉強を教えて貰っている時に俺の名前を別読みして有る方式に当てはめるとキヨンという文字が浮かび上がったからだ。

「僕は、創部・・・じゃなくて、創造部の鶴羽 翠なのさ。どうか、創部に着て頂ければ幸いだな。」

そう言ってから鶴羽先輩は嵐か竜巻の様に去って行った。元気な人だな。あの元気は何処から来ているのだろうか。まさか、光合成とかではないだろうな。

そんな事を考えている時、

「・・・創部・・・。」

富山が呟いた。・・・知ってんのか。創部っていう部活を。

部室塔 北側 突き当り

嵐か、春の一番風のごとく帰ってしまった鶴羽先輩。．．．えっと。

「部室塔 北側 三階 突き当り．．．。」

何気なく、呟いてみた。

何処かで聞いた事が有る様な気がする。

．．．気のせいだろうか。

「．．．創部だ．．．。」

は？

「そつぶの部室だよ．．．。部室北突き当りって．．．。」

富山よ。そんなに焦ってどうした．．．？

というか、そつぶって何だ？漢字変換は総武か？創部か？

「ナツ、テメエ知らねエのか？創部っだよ．．．。伝説の．．．。」

驚きだな。こんな普通の高校に伝説が存在していたとは。何だ？宇宙人か？戦隊物のヒーローか何かか？学校の七不思議の一つ、なんて言うなよ。

「創部．．．。創造部。」

創造部、ねえ．．．。

富山が何をそんなに驚いているのかどうかは知らないが、とりあえ

ず俺は、その伝説とやらを聞いてみる事にした。・・・いい暇つぶしだしな。

被害者、創部の伝説を聞き、拉致される。

「俺の兄貴、去年卒業したんだがヨォ・・・」

そう前置きをして富山が話し始めた。

長くなるなら短くしろ。長い話は、ハゲ頭の校長のあいさつとカツラのPTA会長の挨拶in卒業式と入学式で十分だ。

「分あつてるって・・・」

創部の去年の一年・・・つまり、今の二年だな。

そいつら二人が、隣の部活『鉄道部』を見事に廃部に陥れたらしい。

・・・は？廃部？そう言う事だ？さつき見た生徒手帳に書いてあった項目の記憶を探る。幸いな事に、忘れてはいなかったが・・・この記憶力を勉強に行かせないものだろうか。

確か、廃部の条件は『部員数が二人以下になった場合、もしくは顧問が居なくなってしまう場合』じゃなかったか？

「いや・・・俺もよくは知らねえ。」

ただはつきりしてんのは、創部の当時の三年・・・つまりもう卒業しちまった奴らだな。そいつらが居ない中、鉄道部と何かでトラブって、『創部の一年坊二人』vs『鉄道部計28人(一年3人、二年10人、残り三年とOB)』で戦って、創部の一年坊が圧勝したって事だ。」

・・・それは事実なのか？普通の高校生だろ？実は二人は世界を乗

っ取るうとしてゐる悪の組織の一員、なんて古い事言つなよ。

「そりやねえダロ、ナツ。んな、映画館で寝ちまいそんな設定だったら、俺は練炭自殺でもしてやるぞ。」

そーかよ。けど、命は大切にしろよ。

「分あつてるつて……。けど、その二人が襲撃した鉄道部は瞬間に部員が減り、廃部に陥つたらしいがな。」

なんか意味は全く分からないが、超グダグダな戦隊ヒーローみたいだな。お前の兄貴はソツチ系じゃねえだろ？いや、会つた事ねえから知らねえけど。

「いや……。もっぱら俺の兄貴は、ミステリー物好きだからな……。」

……。一つ言つていいか。お前とお前の兄貴、趣味違いすぎだろ。お前はミステリーをとか見ても、トリックを理解できずに犯人だけ分かつて、悲しく終わるタイプだよな。

「うるせえ。」

やれやれ。

まあ、事実だったら凄いだらう。空手か何かの選手なんだろうな。
……。創造部、か……。

「へー？俺達の事、知ってんだ。」

はたまた声がして声のした方を見た。

栗色の髪の毛に小柄な背。人懐っこそうな笑みを見ると、犬を連想させてしまうのは仕方が無い事だろう。格好いいか、可愛いかと聞かれれば、可愛い方に入るこの男子。

・・・何か、こんな展開多くないか？この学校では、この登場の仕方が普通なのか？

「鶴羽から話は聞いた。とりあえず、鶴羽が面白そうだった奴にやあ興味が有るからな。ツラ貸せや。」

・・・何か一昔前のヤンキーみたいだな。ツラ貸せ、なんて始めて言われたぞ？

「とりあえず、二名様を創部に拉致・・・じゃなくて、連行・・・じゃなくて、ご案内することにすらあ。」

そう言つて手首を掴まれた。

・・・嫌な予感。

さつきまで人懐っこそうだった笑みが消えて、バックに黒い物が見えたのは幻覚ではない筈だ。

・・・いや、幻覚なのだが。

「じゃ、御同行つ、と。」

そうして俺たちは、軽謎の少年に連行・・・いや、拉致された。

今でも思う。

抵抗すればよかったと。

創部部室へと誘拐

とりあえず訳の分からないまま連れていかされた俺たちは、抵抗するよりも階段で足を縛れさせない事に頑張って走った。

バン

と勢いよくドアが開いたと思ったら

「大神っ！新人部員、狩ってきた！」

俺は未だ離されない手首に痛みを感じながら言葉にぎよつとした。

「……狩る？狩る……？」

狩りをする、って意味だよな……。で、俺達を狩るって事は……？……どういう事だよ？

「……『誘拐してきた』の間違いじゃねエのか？」

またべつの声が出た。低い声。顔を挙げてみる。すると、

「「……ッ！！！」「」

無表情の何かよく分からない怖い人がコチラを睨んでいた。
こ……怖……。

「誘拐って言うより、拉致ってきた。」

「……身代金目当てか？お前は。」

「そうだな……。ざっと占めて百万位……。?」

「……身代金にしては少ないのではないか?」

「そうか?」

「ああ。」

と頭上で行われる会話に頭がついていけず……。何をしたらいいのかわからなくなったので、とりあえず

「あの……。此処は何処ですか?」

聞いてみる事にした。驚いた様な、呆れた様な複雑な顔をしている少年&大神先輩。

答えたのは、少年だった。

「此処は部室塔 北側三階 突き当り、」

……途轍もなく嫌な予感。

「創部部室。」

久龍先輩の本性

・・・そうぶ、ぶしつ・・・？

「あ、俺、2B久龍。創部部长な。で、こっちの怖いのが2Cの大神。」

少年・・・もとい久龍先輩が大神先輩と自分を指す。

・・・というか、何で貴方が部長なんですか・・・？

普通、大神先輩が部長になるのではないですか？

明らかに人選ミスじゃないですか。

「で？君たちは？」

富山と俺は顔を見合わせ、とりあえず自己紹介をした。軽く頭も下げて。

「漢字は？」と聞かれたので漢字を答えると、

「つて事は、君はキョウか・・・。」

久龍先輩がニヤリと笑って言った

・・・は？何で？

「べ・ん・きよ・う・ぶ・そ・く・」

悪戯っ子の様に一音ずつ区切りながら久龍先輩が言った。・・・鶴羽先輩にも言われた気が。キョウと。・・・どうやってたら、俺の名前がキョウになる？名前の一文字目の夏は、どう頑張っても『カ』か『ナツ』しか読まないと思うが・・・？

「生物学、もつと勉強する事だな。」

・・・はあ。

「ま、とりあえず、座ってみ。」

机に案内され座る。

・・・何だか、広い部室だ。机は二つしかないし、小さい物だが、今座っているソファアー一台を始めとして、筆筒、畳、コンピュータ、水道・・・設備はしっかりしている。

「ま、見ての通り他の部室より広いし、物が多いし、サボれるし・・・。コンクールとかやる事になったら、ちゃんと活動もするし。実績も高いし。どーよ。入る？」

ニコリと聞こえてきそうな位の笑みで久龍先輩が言う。

まあ・・・。確かに・・・。サボるとか聞こえた様な気がするが・・・。

「つまらなくなったら辞めてもいいしさ。辞めるのには反対はしねえぜ？やる・・・よな。」

・・・『？』が消えた様な気がしたのは気のせいではない筈だ。有無を言わせない感じだった。

何故かは知らないが、この人に逆らってはいけない気がした。本能ってやつだろう。

・・・まあ、つまらなくなったら辞められると言つのは良い事だ。

「じゃあ。ホイ。保護者印は、いらないから。ハンコの代わりに親

指で、ポンって。」

と久龍先輩が、何処からか『入部届け』と書かれた紙と、赤いインク入れを差し出す。

なんとなく、本能が危ないと言っていたような気がするが気のせいだろう。

俺は富山が早速記入しているのを見て

記入を始めた。そして、『印』と書かれた所にインクを含めた親指を押し、久龍先輩に差し出した。

「・・・キヨウ、富山。心から同情する。」

大神先輩がそう言ったのは久龍先輩が受け取った同時くらいだったと思う。

言葉の意味が分からない、と聞こうとすると

「おっしゃー！！奴隷、完了っ！！やっぱ、飴と鞭って効くんだなッ！」

あーはっははは・・・という感じの笑い声と共にそんな声が聞こえた。もちろん主は、久龍先輩。

・・・奴隷？

「いいか、部長の言った事は絶対服従、誠心誠意で取り組みっ！！」

俺達を順番に指差しながら、人が変わった様な感じで久龍先輩が言った。

・・・ええ・・・？

「久龍、一応新入部員だぞ？丁重に扱ったらどうだ？」

「うるせえ。俺より年下は全員部下だっ！有言実行！俺の駒だ！！
しかも、後輩だぞ！丁重に扱う訳ねえだろ！」

さつきとは違う意味での、笑顔を浮かべている久龍先輩。
慣れた様に溜息をつく大神先輩。
もしや・・・久龍先輩って、

「多重人格・・・？」

創部歴史にまとめたら。

こんな事、創部歴史にまとめたらあり得ないくらいの小さな出来事に収まってしまっただろう。

それ位、これから起きる事は奇想天外だったのだから。

しかし、今思えばいい酒のつまみだ。

俺達が創部を敵に回すと言う事がどういう事なのか分かったのはその日の放課後、そして二週間後の事だった。

いまになっては、慣れっこの事だが当時の俺がどれだけ驚いたと言え、そうだな。

今ドラえもんとか乗るネコ型ロボットが来て、何処でもドアやスモールライト、タケコプターといった道具で遊び始めてしまうの以上だったと記憶している。

久龍先輩の特技

放課後。

久龍先輩がこんな事を言いだした。

「公園に行こう！」

と。

・・・嫌な予感がする。

というか、嫌な予感しかしない。

きっとブランコや滑り台で遊ぶ、なんて事を想像したかった。

が、久龍先輩が続けた言葉でその希望はミサイルで打ち抜かれた。

「俺の特技、見せてやるよ。」

そう、俺と富山の肩を掴み有無を言わせない笑みを漏らしたのだ。

という訳で放課後。

場所は人気がない路地を通った所に有った運営状況を調べたくなるような公園。

もっているのはシャベル二本とジョウロ。無論、持ってきたのは俺と富山な。

砂場とブランコしかないのにもかかわらず、こんなに、だだっ広い必要はあるのだろうか。

俺が考えていると久龍先輩は一人で砂場に行き、落ちていた木の枝をもって真中あたりに円を書き

「この辺、掘れ。」

とだけ言っつてベンチに座った。

掘れ・・・？

俺と富山が顔を見合わせ、大神先輩に助けを求めたが、大神先輩は久龍先輩の横に行つてしまった。

・・・何という・・・。

「いいから。掘つてみ。面白い物が見れるから。」

掘れ、ねえ・・・。

俺と富山は学生服に泥を付けながら掘る事にした。

・・・懐かしいな。

前に母親と共にブラジルにタダで行こうと言つて砂場で掘つた事がある。

鳥が鳴き始めた頃、俺たちの希望はコンクリートの地面によって止められ、半ベソを掻きながら帰つたのを覚えていた。

しかし、この公園は結構深い。俺の脚と富山の足が埋まるくらいになつた時、コンクリートの地面に当たつた。

鳥が鳴きはじめた頃だつた。

掘れた事を告げると、久龍先輩は立ち上がつてポケットの中から何かを出した。

全ては夜9時に始まる。

ポケットから出した物は、野球のボールだった。・・・すまん。硬式が軟式までは分からない。俺は野球少年だった訳ではないからな。それを俺達の掘った砂場に入れ土をかぶせていった。・・・大丈夫だろうか。野球のボールを砂場の底なんか埋めて。それで何をすめるのだ？というか、ソレは特技に繋がるのか？久龍先輩は見事に埋め終わったのを見ると嬉しそうな顔をしてジヨウロウの中に水をふんだんに入れ、砂場全体にかけた。・・・何をしようとしているのだろうか。太陽が沈み、早くも町の蛍光灯がつき始めた頃、

「よし。終わり。」

ニヤリと笑って立ち上がり、こちらの方へ歩いてくる久龍先輩。・・・その笑顔に騙されるほど、俺は馬鹿じゃない。何回も見てきたのだ。・・・今日、初めて会ったが。久龍先輩のその何かを企んでいる様な笑顔が持つてくるのは、決して幸福ではない事は断言できる。

「じゃ、お前ら。解散。夜九時キツカシ00秒に高い所からこの砂場を見る事。以上。」

そう言って久龍先輩は掛けて行った。

・・・

何が起こるんだ？

夜九時に。

家でのんびりとした日常

幸いにも、俺の家は一軒家でその上俺の部屋は二階なのでソコソコ眺めもいい。いざとなったら、隣のマンションに上ってみようと考え、家に帰った。当然の様に俺の部屋に妹がいた。・・・何故居る？俺の部屋だぞ・・・。

「あー。おかえりー。ナツくん〜。」

ただいま。愛嬌をふりまくな・・・。何で、此処にいるんだ？

「えー？あのねー。ミイのお世話してたの〜。」

俺の部屋で、か？

「そっくだよ〜。」

・・・やれやれ。

「ナツ君、怒っているのー？」

怒ってねえよ。

俺は流石に3つも年下で、尚且つ俺の妹は見た目も幼い妹に怒るほど、切れっばい奴じゃねえよ。

お前に怒ってみろ。

母親から、倍返しされる。

ついでにミイとは、うちの猫だ。

本名は別にあるのだが、短くされたらしい。

まあ、そっちの方が可愛いから構わないが。

「今何時だ？」

えっとねー、といいながら妹は時計を見上げる。

「8時、55分を少し過ぎた所〜。」

・・・残り五分、か。

「ナツ君、今日遅かったねえー。心配してたよ〜。」

そうか。寂しくなかったか？

「うん。ゲームやってた。ナツ君の所ゆーぎー使ってやってないよ〜。」

良かった。そりゃ。

この前は、勝手に人のユーザーを使われ、寝る前に一生懸命ゴール付近まで行けたのにもかかわらず、データ削除されたからな。あまりにもシヨックで当分、動けなかった。

「あと、ナツ君。お母さん、今日もお仕事だつて〜。」

そうか。

時計を見る。

9時になった。

花火

ヒューという何処かで聞いた音がして、窓を見た。
妹も一緒についてくる。

真っ暗な空に一本の筋が伸びあがる。

その筋はどんどん高くなり、止まったと思ったら
パン
破裂した。

「わー。ナツ君。花火だよお。」

花火……。

今日、花火大会が有るなんて聞いていない。

思い当たるのは……。

久龍先輩の笑み。

「全ては9時に始まるから。」

耳に響く久龍先輩の声。

……まさかあの人が……。

高校2年生である、久龍先輩がこれを……？

花火を作った……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7234v/>

創造部

2011年11月16日22時24分発行